ー国内動向ー

1　東京都･大阪市中央卸売市場の需給動向（令和7年12月）

【ポイント】

●気温は、全国的に高く、降水量は、北日本日本海側と北日本太平洋側で多かった一方、西日本日本海側と西日本太平洋側では少なかった。日照時間は、西日本太平洋側でかなり多かった。降雪量は、北・東・西日本日本海側で少なかった。
●東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万477トン、前年同月比103.4%、価格は１キログラム当たり307円、同86.9%となった。
●大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は３万6810トン、前年同月比102.1%、価格は１キログラム当たり272円、同86.9%となった。
●北海道産のたまねぎおよびばれいしょは不作で高値となっているが、その他の野菜の価格は、前年の高値の反動もあり、市場価格は2月まで安値傾向で推移すると見込まれる。

（1）気象概況

上旬は、旬平均気温は、低気圧が北海道付近を通過することが多く、低気圧に向かって南から暖かい空気が流れ込みやすかったため、北日本では高かった。東日本、西日本、沖縄・奄美では、平年並みだった。

旬降水量は、北日本では低気圧や低気圧通過後の冬型の気圧配置による一時的な寒気の影響で曇りや雪または雨の日が多かった。北日本日本海側では、低気圧の影響で大雨となった所があった。東・西日本と沖縄・奄美では旬の前半を中心に冬型の気圧配置となって寒気が流れ込んだ日もあったが、高気圧に覆われ太平洋側中心に晴れた日が多かったため、東・西日本太平洋側と西日本日本海側でかなり少なかった。

旬間日照時間は、高気圧に覆われて晴れた日もあったため、東・西日本太平洋側でかなり多く、北・西日本日本海側と沖縄・奄美で多かった。

中旬は、冬型の気圧配置が長続きせず、全国的に天気は周期的に変わった。

旬平均気温は、低気圧に向かって南から暖かい空気が流れ込みやすかったため、全国的に高かった。

旬降水量は、14日から15日には北海道付近で低気圧が発達し、北海道オホーツク海側中心に大雪となった所があり、低気圧の影響を受けやすかった北日本太平洋側でかなり多く、低気圧の影響を受ける時期のあった東日本太平洋側と西日本日本海側で多かった。

旬間日照時間は、高気圧に覆われやすかった東日本日本海側でかなり多く、西日本日本海側と西日本太平洋側で多かった。一方、低気圧の影響を受けやすかった北日本太平洋側では少なかった。

下旬も冬型の気圧配置が長続きせず、北・東・西日本で天気は周期的に変わった。日本付近を低気圧が通過し全国的に天気が崩れた日もあった。26日頃は冬型の気圧配置が一時的に強まり、北日本や東日本日本海側中心に暴風雪や大雪となった所があったほか、31日も北日本日本海側で大雪となった所があった。

旬平均気温は、低気圧に向かって南から暖かい空気が流れ込み、北・東日本でかなり高く、西日本と沖縄・奄美で高かった。

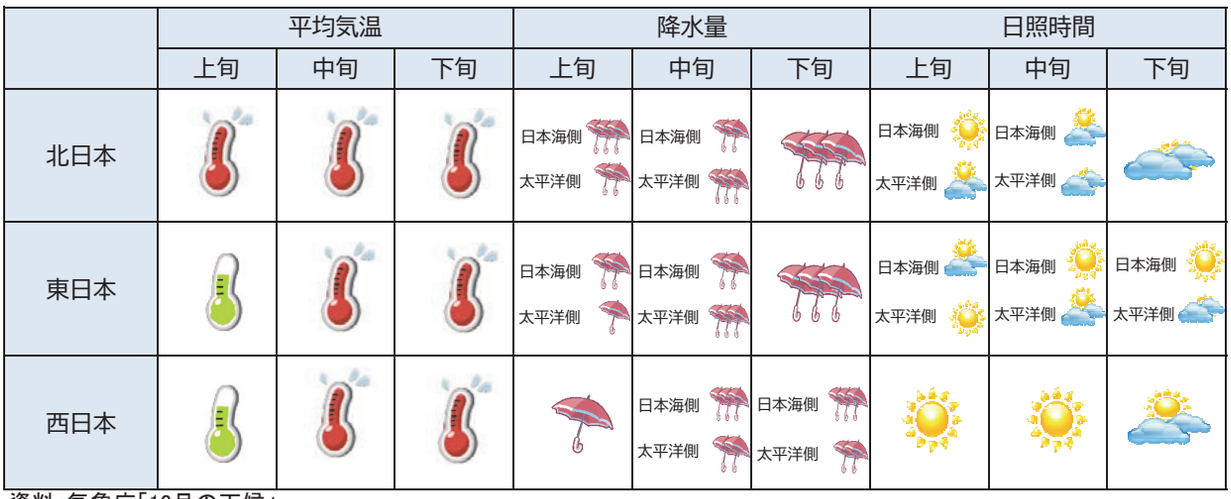
旬降水量は、低気圧の影響を受けやすかった東日本日本海側でかなり多く、北･東日本太平洋側、北・西日本日本海側で多かった。気圧の谷や湿った空気の影響を受けやすかった沖縄・奄美でも多

かった。

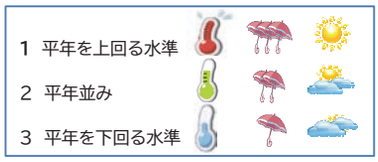
旬間日照時間は、北日本日本海側と沖縄・奄美ではかなり少なかった。北・東日本太平洋側で少なかった。一方、寒気の影響が一時的であった東日本日本海側では多かった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は図1の通り。

図１　気象概況



資料：気象庁「12月の天候」



（2）東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は11万477トン、前年同月比103.4%、価格は１キログラム当たり307円、同86.9%となった（表１）。

表１　東京都中央卸売市場の動向（12月速報）

品　目	入荷量（t）	前年比（%）	平年比（%）	価格（円/kg）	前年比（%）	平年比（%）	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	110,477	103.4	83.6	307	86.9	115.9	287	299	337
だいこん	10,037	102.5	94.4	81	67.9	108.7	71	79	93
にんじん	7,104	103.2	86.1	176	97.5	136.7	174	173	182
はくさい	15,126	95.5	96.9	55	68.3	119.5	51	52	63
キャベツ類	13,016	129.2	101.3	85	35.4	90.6	81	85	89
ほうれんそう	1,730	121.8	110.1	526	81.0	110.1	495	500	591
ねぎ	5,318	103.4	95.2	403	86.1	118.1	373	376	456
レタス類	6,203	112.1	95.9	214	48.9	92.2	193	214	233
きゅうり	3,707	103.3	90.0	502	90.3	117.4	469	492	551
なす	1,127	114.9	83.3	547	79.5	115.1	539	548	555
トマト	3,065	99.3	70.9	630	96.7	143.4	667	608	620
ピーマン	1,456	99.7	84.1	628	81.1	135.9	649	629	601
さといも	1,138	88.7	75.5	476	120.2	137.1	416	472	520
ばれいしょ	6,396	91.0	84.1	283	159.8	185.8	290	277	281
たまねぎ	7,233	89.5	83.0	228	158.1	167.4	233	223	229

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」
注１：平年比は過去５カ年（令和２～６年）平均との比較。
注２：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの９市場のデータである。

根菜類は、にんじんの価格が、高値で推移した前年をわずかに下回り、平年を３割以上上回った（図２）。

葉茎菜類は、はくさいの価格が、大幅に高値で推移した前年を３割以上下回り、平年を２割近く上回った（図３）。

果菜類は、トマトの価格が中旬以降やや落ち着いたものの、堅調な動きとなり、大幅に高値で推移した前年をやや下回り、平年を４割以上上回った（図４）。

土物類は、ばれいしょの価格が絶対量不足から堅調に推移し、大幅に高値で推移した前年を６割近く上回り、平年を８割以上上回った（図５）。

なお、品目別の詳細については表２の通り。

図２　にんじんの入荷量と卸売価格の推移

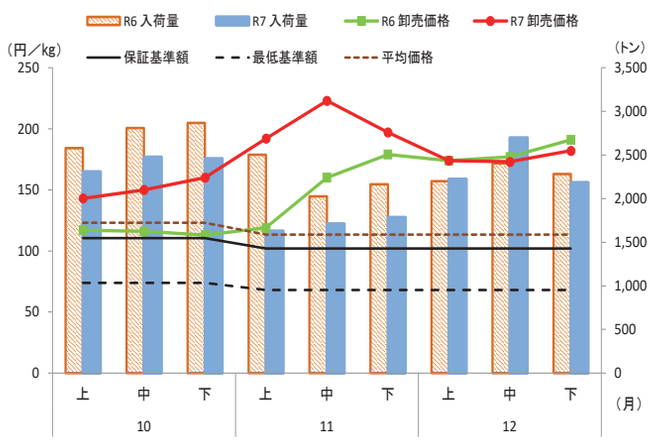


図３　はくさいの入荷量と卸売価格の推移

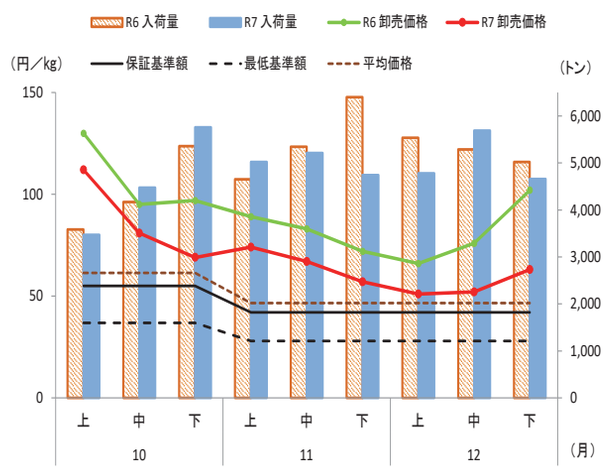


図４　トマトの入荷量と卸売価格の推移

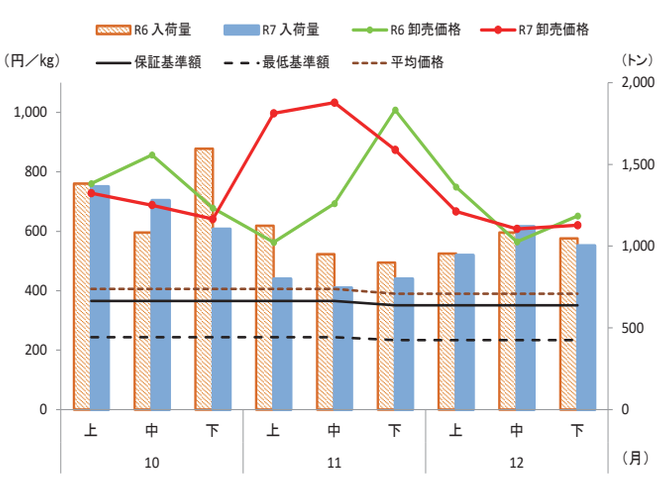
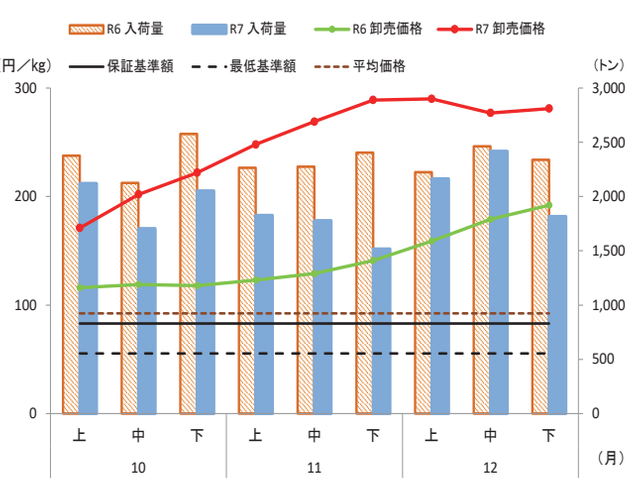


図５　ばれいしょの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

※１　卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。

※２　平均価格とは、事業における過去6カ年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。

※３　事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されるとは限らない。

表２　品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	12月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	千葉産を中心に神奈川産の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、適度な降雨もあり、生育はおおむね順調である。病害虫の発生も少なく、品質も良好となってきている。神奈川産の作付面積は前年並みで、播種期から生育期の高温傾向から、その後の低温はあったものの生育はおおむね順調であった。やや虫害が散見される。総入荷量は少なかった前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。 価格は、下旬に価格を上げたものの、大幅に高値で推移した前年を3割ほど下回り、平年を1割近く上回った。
	にんじん	千葉産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、早生品種の生育はやや不良であったが、中生以降の生育は天候と適度な降雨に恵まれおおむね順調であった。輸入の中国産は前年をやや上回っている。総入荷量は、少なかった前年をやや上回り、平年を1割以上下回った。 価格は、高値で推移した前年をわずかに下回り、平年を3割以上上回った。
葉茎菜類	はくさい	茨城産中心の入荷であった。作付面積は前年の高値により作付け意欲が高く、前年をやや上回った。高温･乾燥の影響で生育はやや遅延傾向である。また歩留まりが低下している。総入荷量は前年、平年ともにやや下回った。 価格は、下旬に底上げとなったものの大きな動きはなく、大幅に高値で推移した前年を3割以上下回り、平年を2割近く上回った。
	キャベツ類	愛知産、千葉産中心の入荷であった。愛知産の作付面積は前年並みで、地域差が見られやや小玉傾向の圃場もあるが、適度な降雨にも恵まれ、生育はおおむね順調であった。千葉産の作付面積は前年並みで、適度な降雨と高めの気温に恵まれ生育は前進傾向であった。降雨の影響による病害が散見されるが、大きな影響はみられない。総入荷量は、大幅に少なかった前年を3割近く上回り、平年をわずかに上回った。 価格は、大きな動きはなかったものの、暴騰した前年を6割以上下回り、平年を1割近く下回った。
	ほうれんそう	群馬産、茨城産中心の入荷であった。群馬産の作付面積は前年並みで、夏季の高温・乾燥や、生育期の低温・乾燥などによる生育停滞が散見されたが、生育はおおむね順調である。病虫害の発生が散見される。茨城産の作付面積は前年並みで、高温・乾燥の影響で一部生育のばらつきが散見されたが、回復しおおむね順調であった。総入荷量は少なかった前年を2割以上上回り、平年を1割ほど上回った。 価格は、安定した数量から下旬後半になっても動きが鈍く、大幅に高値で推移した前年を2割近く下回り、平年を1割ほど上回った。
	ねぎ	茨城産、千葉産、埼玉産など、関東秋冬作中心の入荷であった。茨城産の作付面積は前年並みで、夏場の高温・乾燥により、生育、肥大は遅延傾向であった。千葉産の作付面積は前年並みで、高温・乾燥の影響や高温対策から定植を遅らせた影響により、生育はやや遅延傾向だが、関東産の中では比較的肥大は進んでいる。埼玉産の作付面積は前年並みで、高温・乾燥による肥大不足からは回復傾向であるが、虫害がやや多い。輸入の中国産は前年を1割以上下回っている。総入荷量は、前年をわずかに上回り、平年をやや下回った。 価格は、12月24～25日の降雨により、年末に不足感が出たことから単価が上がり、高値で推移した前年を1割以上下回り、平年を2割近く上回った。
	レタス類	静岡産、茨城産中心の入荷であった。静岡産の作付面積は前年並みで、前年の高温を受けて定植を遅らせたことや、乾燥およびその後の低温で生育はやや遅れている。茨城産の作付面積は前年並みで、高温・乾燥の影響により、一部産地の生育遅延が見られたがおおむね順調であった。他の西南暖地は概して高温・乾燥の影響が散見される。総入荷量は少なかった前年を1割以上上回り、平年をやや下回った。 価格は、下旬に向けて価格を上げたものの、大幅に高値に推移した前年の半値以下となり、平年を1割近く下回った。
果菜類	きゅうり	宮崎産を中心に千葉産、高知産などの入荷があった。宮崎産の作付面積は前年をやや下回った。生育はおおむね順調だが、一部曇雨天の影響により、生育不良や病虫害が散見される。千葉産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、日照不足の影響で果実肥大の遅れが見られる他、病害の発生も散見される。高知産の作付面積は前年並みで、天候に恵まれ生育は安定。病虫害の発生は少ないが、一部圃場で成り疲れによる樹勢低下が見られる。総入荷量は少なかった前年をやや上回り、平年を1割下回った。 価格は、下旬に向けて徐々に価格を上げ、高値で推移した前年を1割弱下回り、平年を2割近く上回った。
	なす	高知産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、安定した気候から生育は順調で、平年並みで推移している。一部圃場で虫害が散見されているものの、この被害は抑えられているが、病害が散見される。総入荷量は大幅に少なかった前年を1割以上上回ったものの、平年を2割近く下回った。 価格は絶対量不足から堅調推移となり、大幅に高値で推移した前年を2割強下回ったものの、平年を1割以上上回った。

	トマト	熊本産、栃木産、愛知産中心の入荷であった。熊本産の作付面積は、前年をやや下回った。夜温の低下による裂果が発生し、病害も散見されるが回復傾向である。栃木産の作付面積は前年並みで、促成作の生育はおおむね順調だが、気温の低下により着色が遅延傾向にある。冬春作の樹勢は良好だが、病虫害が散見される。愛知産の作付面積は、前年をやや下回り、高温の影響で小玉傾向であったが、玉の肥大は回復傾向であるが、病害が散見される。総入荷量は少なかった前年並みとなり、平年を3割弱下回った。 価格は、中旬以降やや落ち着いたものの、堅調な動きとなり、大幅に高値で推移した前年をやや下回り、平年を4割以上上回った。
	ピーマン	宮崎産を中心に茨城産、高知産、鹿児島産などの入荷があった。宮崎産の作付面積は前年をやや下回り、生育はおおむね順調だが、一部圃場で急激な気温の低下、着果負担による樹勢低下が散見された。また、病虫害の発生が増加傾向である。茨城産の作付面積は前年並みで、一部低温による生育遅延が散見されたものの、回復傾向にあり、中旬までにほぼ切り上がる。高知産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調だが、病虫害が散見される。鹿児島産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調であった。総入荷量は少なかった前年並みとなり、平年を1割以上下回った。 価格は、下旬に向け徐々に落ち着いたものの堅調に推移し、大幅高値に推移した前年は2割近く下回ったものの、平年を3割以上上回った。
土物類	さといも	埼玉産を中心に愛媛産などの入荷があった。埼玉産の作付面積は前年並みで、高温・乾燥により、圃場により生育と正品率にばらつきがみられ、概して小玉傾向であった。12月中は、不足感が出たままで終了した。愛媛産の作付面積は前年をやや下回ったが、目立った病害もなく、玉肥りもよく生育良好であった。輸入の中国産についてはほぼ前年の倍の入荷があった。総入荷量は、少なかった前年を1割以上下回り、平年を2割以上下回った。 価格は、不足感が出た年末に向けて価格を上げ、やや高値に推移した前年を2割ほど上回り、平年を4割近く上回った。
	ばれいしょ	北海道産を中心に長崎産の入荷があった。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫が終了した。夏場の高温・乾燥の影響により、小玉傾向であった。発芽などの品質不良が散見される。長崎産の作付面積は前年並みで、夏季の高温対策で定植を遅らせている傾向ではあるが、生育はおおむね順調である。やや小玉傾向ではある。総入荷量は、少なかった前年を1割近く下回り、平年も2割近く下回った。 価格は、絶対量不足から堅調推移となり、大幅な高値で推移した前年を6割近く上回り、平年を8割以上上回った。
	たまねぎ	北海道産中心の入荷であった。北海道産の作付面積は前年並みで、収穫を終了した。高温・乾燥、定植遅れと非常に厳しい環境の影響により、小玉傾向であった。輸入の中国産は前年を7割以上上回り、アメリカ産が大幅に増加した。総入荷量は、少なかった前年を1割強下回り、平年も2割近く下回った。 価格は、絶対量不足で大玉を中心に高値となり、前年を6割近く上回り、平年を7割近く上回った。

（執筆者：東京シティ青果株式会社　平田　実）

（3）大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万6810トン、前年同月比102.1％、価格は1キログラム当たり272円、同86.9％となった（表3）。

品目別の詳細については表4の通り。

表3　大阪市中央卸売市場の動向（12月速報）

品　目	入荷量（t）	前年比（％）	平年比（％）	価格（円/kg）	前年比（％）	平年比（％）	価格（円/kg）の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	36,810	102.1	91.3	272	86.9	118.9	268	272	277
だいこん	3,898	122.5	105.4	94	62.5	104.7	84	85	112
にんじん	2,394	102.9	91.9	182	82.7	128.4	175	189	179
はくさい	6,841	94.1	101.5	67	63.3	104.9	62	62	75
キャベツ類	4,414	124.6	96.3	87	34.3	92.4	85	87	88
ほうれんそう	563	143.5	110.0	526	71.1	104.5	559	526	491
ねぎ	1,266	107.1	99.5	510	79.6	106.7	470	477	573
レタス類	1,066	125.4	88.1	188	43.9	90.2	186	193	185
きゅうり	874	101.2	86.1	465	91.2	115.4	442	459	501
なす	362	95.4	90.5	490	88.7	115.1	502	504	458
トマト	858	100.2	68.4	586	96.8	140.8	585	589	585
ピーマン	473	120.2	114.0	608	79.8	130.3	446	615	560
さといも	247	93.7	79.9	450	94.4	125.9	642	450	455
ばれいしょ	2,099	72.0	73.2	281	161.7	195.0	288	276	278
たまねぎ	3,927	86.4	80.2	223	158.1	171.5	225	213	235

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注1：平年比は過去5カ年（令和2～6年）平均との比較。
注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

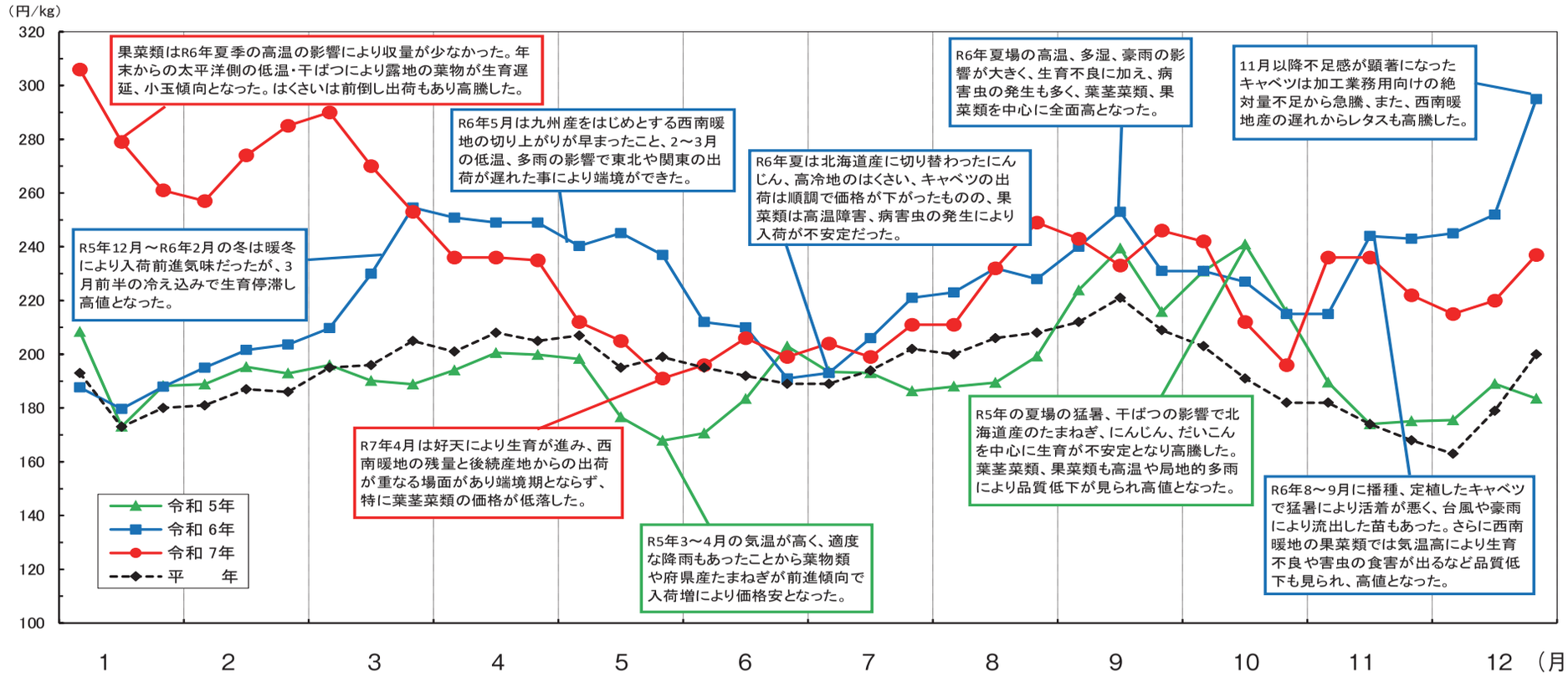
表４　品目別入荷量・価格の動向（大阪市中央卸売市場）

類別	品目	12月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	和歌山産、鹿児島産、徳島産、長崎産が主体となった。各地とも、悪天候や気温低下などはなく、順調な出荷が続いた。全体の入荷量は旬を追うごとに増量となり、月間では前年を大幅に上回り、平年をやや上回った。 消費地の気温はそれほど低くならず、需要は伸び悩んだ。前年の価格が高かったことも影響したが、引き合いが強まらず価格は低迷し、年末に向けて上伸したものの、月間では高値で推移した前年を4割近く下回り、平年をやや上回った。
	にんじん	上・中旬は長崎産が、中旬以降は鹿児島産も主体となる入荷であった。長崎産はやや前進気味で、月間の入荷量は前年をかなり下回った。鹿児島産は順調な出荷が続き、月間の入荷量は前年の2倍以上となった。正月用商材の金時人参の入荷もあり、香川産の生育が良く、太物中心の出荷により、入荷量は前年を上回った。長く続いた不足感から、輸入品へシフトしていたが、国産の増量に伴い国産品の調達に回帰し、旬を追うごとに輸入の中国産は入荷減となった。月間の入荷量は前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度下回った。 価格は、長く続いた不足感の影響が残り高値で推移したが、月間では高値で推移した前年を大幅に下回り、平年を3割近く上回った。
葉茎菜類	はくさい	茨城産を中心に、和歌山産や愛知産などの入荷があった。各地とも干ばつの影響で玉伸びが悪く、上・中旬は小玉傾向な上、産地出荷量は伸び悩んだ。下旬に降雨があり、生育は回復傾向となったが、月間全体の入荷量は、前年をやや下回り、平年をわずかに上回った。 価格は極端に高値だった前年を全旬とも大幅に下回ったが、年末需要に向けて旬を追うごとに上伸した。月間では、前年を4割近く下回り、平年をやや上回った。
	キャベツ類	愛知産が主体となり、中旬までは茨城産の残量入荷や他各地の入荷もあった。愛知産は順調な出荷が続き、全旬とも入荷量が多く、月間では少なかった前年を大きく上回った。他の各産地も順調な入荷となり、月間全体では、前年を大幅に上回り、平年をやや下回った。 価格は極端に高値だった前年を全旬とも大きく下回ったが、年末需要に向けて旬を追うごとに上伸した。月間では前年を7割近く下回り、平年をかなりの程度下回った。
	ほうれんそう	徳島産と福岡産が主体となる入荷であった。各地とも生育良好で、順調な出荷が続いた。月間の入荷量は、徳島産が前年を上回り、福岡産は前年の2倍近くとなった。月間全体の入荷量は、前年を4割以上上回り、平年をかなりの程度上回った。 価格は、前年の野菜類全体の高値の影響もある中で引合いが強まらず、需要は伸び悩み、月間では前年を3割近く下回り、平年をやや上回った。
	ねぎ（白ねぎ）	群馬産が中心となり、長野産の残量入荷や鳥取産の入荷などもあった。各地とも生育順調で平年並みの出荷が続き、月間全体の入荷量は前年並みであった。 価格は、単価自体は年末需要に向けて旬を追うごとに上伸したが、高値だった前年を全旬とも下回った。
	ねぎ（青ねぎ）	青ねぎは、徳島産を中心に香川産や大阪産、高知産などの入荷があった。小ねぎは、高知産を中心に静岡産などの入荷があった。各地とも生育良好で、順調な産地出荷が続いた。月間の入荷量は徳島産と高知産は前年をかなり上回り、香川産や大阪産は前年を大きく上回った。月間全体の入荷量も前年を上回った。 価格は、高値だった前年の影響がある中で、末端の荷動きが悪く引合いが強まらず、月間では前年を大幅に下回った。
	レタス類	ラップ物は兵庫産を中心とする入荷で、裸物は鹿児島産と長崎産が主体となった。兵庫産は順調な出荷が続き、全旬とも入荷量の多い状況が続いた。鹿児島産は月の前半が多く、長崎産は同じく後半が多かったことから、九州産地からの入荷量は全体的に多かった。月間全体の入荷量も前年を大幅に上回った。サニーレタスは、福岡産が中心となる入荷で、干ばつ傾向から産地出荷量が伸びず、旬を追うごとに増量傾向となったものの、入荷量は伸び悩んだ。月間全体では、前年を下回った。リーフレタスも福岡産が中心となる入荷で、サニーレタス同様に干ばつで産地出荷量が伸びず、需要も高まらないことから入荷量も少ない状況が続いた。レタス類全体での月間の入荷量は、前年を2割以上上回り、平年をかなり大きく下回った。 玉レタスの価格は、入荷増量から安値で推移した。月間の価格は、高値だった前年の3割程度にとどまった。サニーレタスは、量販店の荷動きが悪く引合いが強まらなかったため、価格も伸び悩んだ。リーフレタスも、月間では高値だった前年の半値以下の価格となった。レタス類全体の月間の価格は、前年の半値以下となり、平年をかなりの程度下回った。

果菜類	きゅうり	宮崎産と高知産が主体となり、徳島産などの入荷があった。量販店の特売需要などが少なく、積極的な荷引きができない上、末端売価も高く需要は伸びなかった。月間全体の入荷量は、少なかった前年をわずかに上回り、平年をかなり大きく下回った。 価格は、全旬とも高値だった前年を下回ったが、産地からの指示価格が高く、年末に向けて旬を追うごとに上伸し、月間では前年をかなりの程度下回り、平年をかなり大きく上回った。
	なす	千両系は、高知産が中心となる入荷で、長なすは福岡産と熊本産が主体となる入荷であった。急な気温低下で生育が鈍化し、産地出荷量は伸び悩んだ。月間全体の入荷量は、極端に少なかった前年をやや下回り、平年をかなりの程度下回った。 量販店の売場展開が少なく、需要は伸び悩んだ。月間の価格は、高値だった前年をかなり大きく下回り、平年をかなり大きく上回った。
	トマト	愛知産と熊本産が主体となる入荷であった。熊本産の出回りが少なく、全旬とも入荷量が少ない状況が続いた。月間の入荷量は前年並みで、平年を3割以上下回った。 価格は全旬とも高値で推移したが、月間の価格は高値だった前年をやや下回り、平年を4割以上上回った。
	ピーマン	宮崎産と高知産が主体となる入荷であった。急な気温低下で生育が鈍化し、産地出荷量も伸び悩んだ。月間全体の入荷量は、少なかった前年を大幅に上回り、平年をかなり大きく上回った。 前月から量販店の売場展開が少なく引合いが強まらなかったため、価格は伸び悩んだ。月間では、高値で推移した前年を2割以上下回り、平年を3割上回った。
土物類	さといも	愛媛産が中心となる入荷であった。正月商材の海老芋の入荷が静岡産を中心にあった。各産地とも出荷量は少なく、全体としての入荷量も伸び悩んだ。年末に向けた需要に対して輸入の中国産の引合いもあったが、前年に比べるとかなり少なかった。月間全体では、前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。 年末用の需要があり引合いが強いが、絶対量が少なかったことから、価格は高値で推移した。月間の価格は前年をやや下回り、平年を2割以上上回った。
	ばれいしょ	丸芋は、北海道産を中心に長崎産の新物の入荷もあった。北海道産は不作で、産地残量が少なく入荷量が少ない状況が続いた。年末需要に向けて旬を追うごとに増量傾向であったが、月間では前年をかなり下回った。長崎産は北海道産の不足を補う形で入荷増量となった。メークインは北海道産の入荷であったが、不作で産地残量が少なく、入荷量が少ない状況が続いた。ばれいしょ全体の月間の入荷量は、前年、平年ともに3割近く下回った。 価格は、北海道産の絶対量不足から高騰して推移した。月間では、丸芋が前年を大幅に上回り、メークインは前年の2倍以上となった。ばれいしょ全体でも前年の1.6倍となり、平年の2倍近い価格となった。
	たまねぎ	北海道産が中心となり、兵庫産の入荷もあった。北海道産が不作で産地残量が少ない中で、入荷量も少ない状況が続き、月間では前年を大幅に下回った。輸入の中国産の入荷は、前年を大幅に上回った。月間全体の入荷量は、前年をかなり大きく下回り、平年を2割近く下回った。 価格は、絶対量不足から高騰して推移し、月間では前年を6割近く上回り、平年を7割以上上回った。

（執筆者：東果大阪株式会社　新開　茂樹）

（参考）　指定野菜の卸売価格の推移（東京都中央卸売市場）

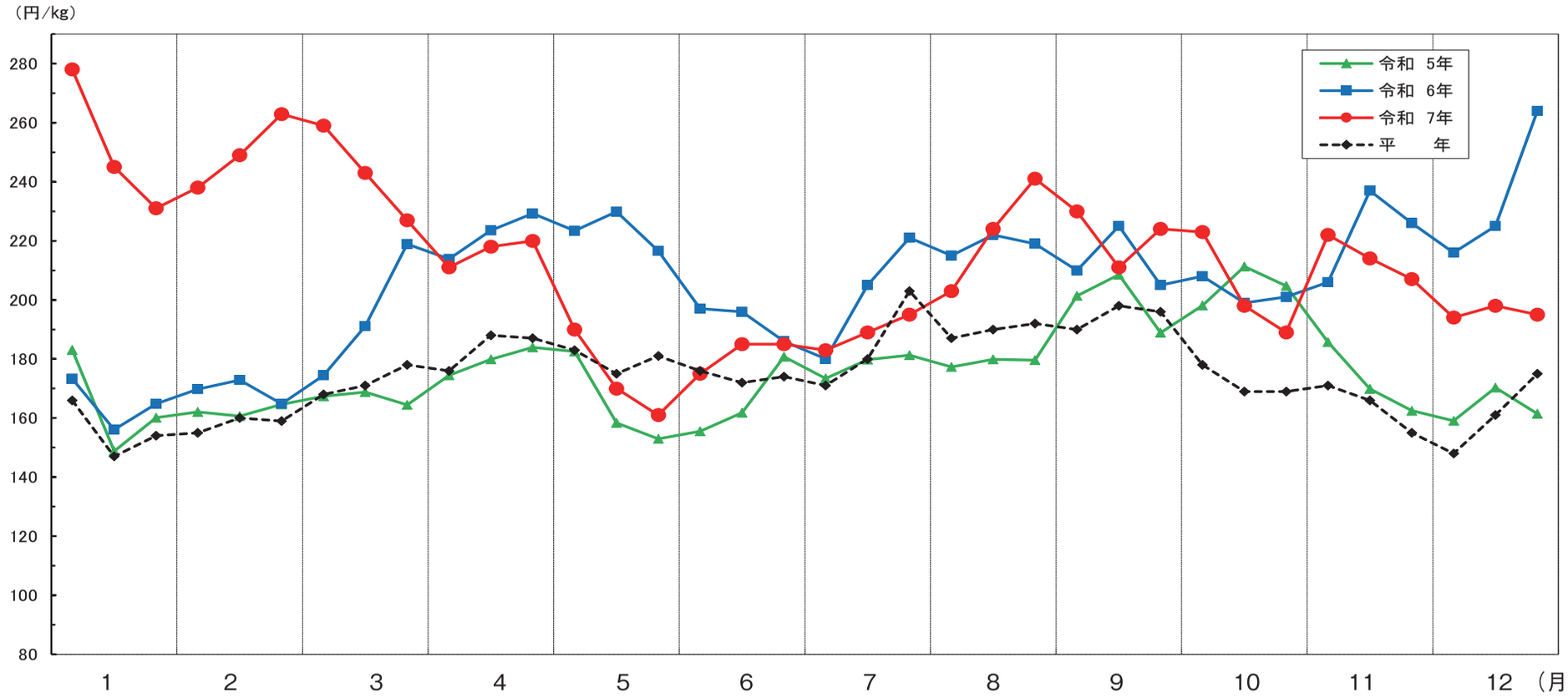


（単位：円／kg）

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
令和５年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224	239	216	231	241	216	190	174	175	175	189	184
令和６年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	247	240	245	233	212	210	191	193	206	221	223	232	228	240	253	231	231	227	215	215	244	243	245	252	295
令和７年	306	279	261	257	274	285	290	270	253	236	236	235	212	205	191	196	206	199	204	199	211	211	232	249	243	233	246	242	212	196	236	236	222	215	220	237
平　　年	193	173	180	181	187	186	195	196	205	201	208	205	207	195	199	195	192	189	189	194	202	200	206	208	212	221	209	203	191	182	182	174	168	163	179	200

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年とは、過去５カ年（令和２年～６年）の旬別価格の平均値である。
注２：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の４市場のデータである。

（参考）　指定野菜の卸売価格の推移（大阪市中央卸売市場）



（単位：円／kg）

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
令和５年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	201	209	189	198	211	205	186	170	162	159	170	161
令和６年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	223	230	217	197	196	186	180	205	221	215	222	219	210	225	205	208	199	201	206	237	226	216	225	264
令和７年	278	245	231	238	249	263	259	243	227	211	218	220	190	170	161	175	185	185	183	189	195	203	224	241	230	211	224	223	198	189	222	214	207	194	198	195
平　　年	166	147	154	155	160	159	168	171	178	176	188	187	183	175	181	176	172	174	171	180	203	187	190	192	190	198	196	178	169	169	171	166	155	148	161	175

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」
注１：平年とは、過去５カ年（令和２年～６年）の旬別価格の平均値である。
注２：大阪本場及び大阪東部市場のデータである。